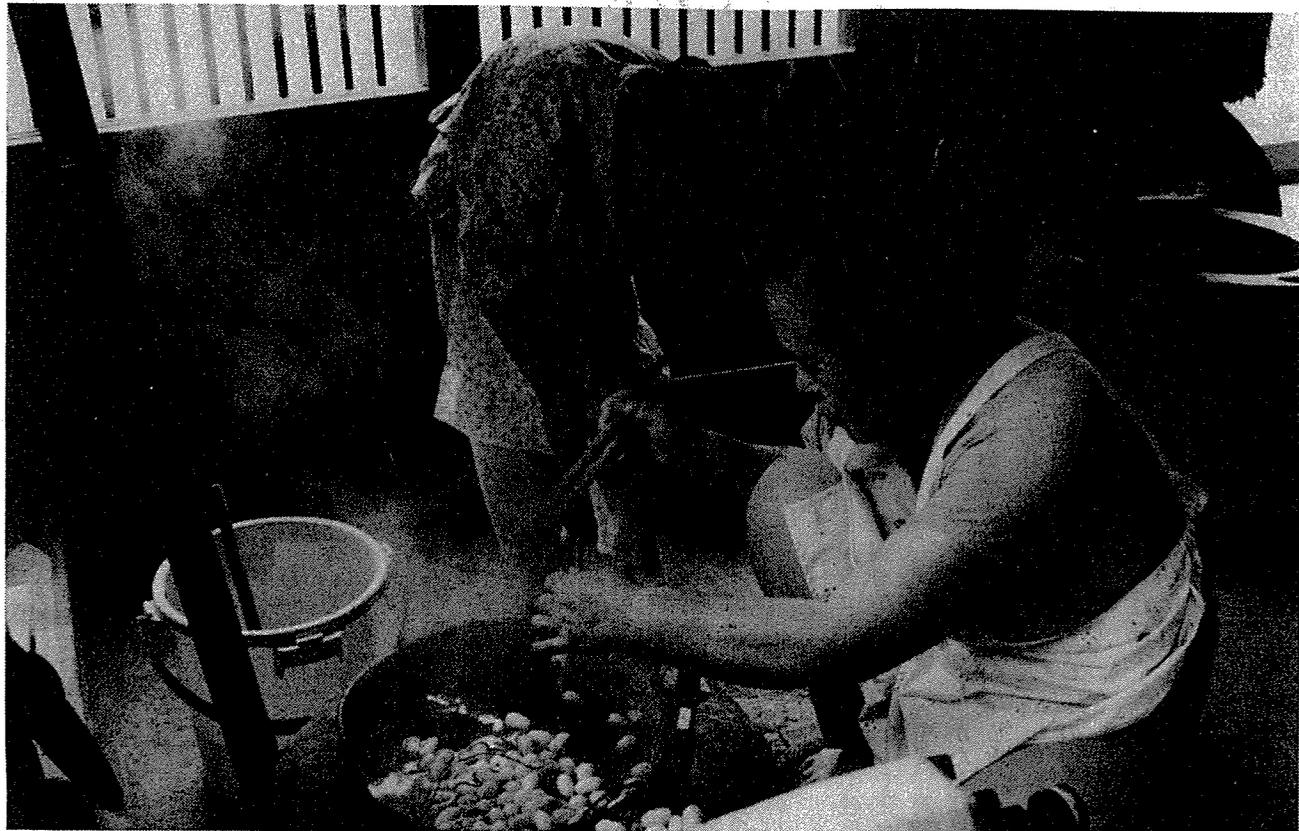


# 生活の伝承 6

発行者 民家園のつどい  
会長 斎藤久一  
発行所 福島市五老内町3番1号  
福島市教育委員会  
文化課内  
民家園のつどい



糸取りの実演

## 「親の意見を俵に詰めて 濱上街道の道普請」

これは、明治の頃の俗謡である。濱上の花街が繁盛した当時、村の内外の若者達が、毎晩この唄を唄いながら濱上街道を通ったと伝えられている。この濱上街道の道筋に当たる田圃の中の一本杉の根元に「姥石」がある。

この大石は、見様によつては、女の臥す姿にも、また跪く姿にも見える。なおよくよく見つめると、幼児を左抱にして、添乳をしている婦人の面影が感じられて、何となく暖かみのある自然石である。昔から、婦人達がこの石を信仰すれば、乳の出が良くなると言い伝えられてきた。旧の霜月十五日には、赤飯や牡丹餅が供えられてあつたと伝えられている。今でも鳥居や絵馬を奉納する信者がある。

一方、三島神社の境内には、「身体の心棒要石」と「若木大權現」と呼ばれている二つの石柱が祀られている。「姥石」が女のシンボルならば、これは男のシンボルとして村人から親しまれたものであろう。

近年になつて私は、この「姥石」を次のように考えるようになつた。それは、古代における条里制の起点となつた石であろうということである。

この「姥石」の東には、「字姥石東」、西には、「字姥石」「字金ノ町」と呼ぶ字名がある。いずれも田並びが良い。一列並びが、約一反四畝歩内外である。それらは、古代における条里制の田圃の女の持分にそつくりなのである。また、この地は増田と呼ばれる。枠のよう四角の田圃の意味で、古文書にも「枠田村」と書いたものがある。

摺上川の対岸の宮代には、「孫六橋」「一丁田」などがある。この条里制の地名のある双方を結ぶ道が、明治の頃まで、濱上街道と呼ばれていたことは、前述の通りであるが、私はそれが古代の奥州街道でなかろうかと思うのである。奈良の都まで、首に駄籠を着けた馬が、鈴を鳴らしながら通つたものであろう。

また、「孫六橋」には、その当時、馬を飼っていた駅家が置かれ、条里制の田圃も、当時の駅田に当ると考えられる。

この他に、条里制を思わせる字名「壺石」「峯越」などがある。

「峯越」は、当時の郡衙の存在を思われるところである。  
もしも今後機会が到来すれば、これらの謎が、同地の発掘調査によって、明るみに出るかもしれない、などと私の夢は尽きることがない。

## 「姥石」について

### 坪池忠夫

# 民俗の伝承

(16)

# むこいじめ

## 秋山政一

### むこいじめ I

佐原の村に、大盡様の並んでる部落があつた。いつかその中の一軒の家で、むこ様をもつた。よく働くむこであつたが、大盡様の家は、かたしい家であつたので、そのむこをいじめて働かせた。

毎日夕方になつて田に出ていた人達が帰つても「まあだ、おてんと様、でてんでないか。山はあんなに明るいでねいか。」といつて夕日が赤く当つている東の靈山の頂きを顎でしゃくつて働かせた。

そのことがあつて以来、このむこが言い残した通り、その部落の屋敷は、次々に離散し、今では墓地と觀音堂の石宮を残すだけになつてしまつてある。

その上今でもその部落の水田を求める不運に会うという。それ以来のことか、佐原では、靈山の山を「むこいじめの山」といつてきたという。

### むこいじめ II

毎年冬の「おがみ講」には、佐原の部落の若者が集つて、新入のむこをいじめた。

毎日夕方になつて田に出ていた人達が帰つても「まあだ、おてんと様、でてんでないか。山はあんなに明るいでねいか。」といつて夕日が赤く当つている東の靈山の頂きを顎でしゃくつて働かせた。

毎年、こうして新むこを水風呂に入れていたが、中には事情を悟つて「後でいいですかぬ男が「それでは先に。」と、自ら我慢して入つてみせ、「いい湯だから入つてみらっせ。」などとだまして、無理に水風呂のご馳走をして、皆で喜んだというのである。

### おかたよばり

安達郡の二本柳には、江戸時代以来、正月十五日の早朝、渋川の熊野神社へ「暁詣り」といつて村中の若者が揃つてお詣りに出た。

必ず各部落からの若者達が集つて集団となつて登つたというが、熊野神社までの途中で、例年、若者達によつて行われる「おかたよばり」という行事があつた。むこいじめとも考えられるものであつた。

これは、昨年中に結婚した初むこを参道の途中の部落を見下す平地（毎年ここにきまつっていた）に立たせて、自分の家の方向へ、大声で自分の妻の名を呼ばせる行事であつた。

先輩達の後の方で「ホラ、始めろ」といふ合図で、初むこは恥ずかしさもあつて、低い声で呼ぶことでもあろうものなら、後いる若者達（一度は自己言わされた経

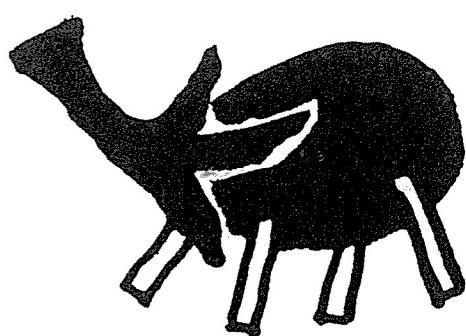
内々相談しておいて事情を知らないむこに「ここでは新むこ様に一番先に入つてもらうことになっているから。」といって、沸いてもいな水風呂に入れては、皆で喝茶したという。

毎年、こうして新むこを水風呂に入れていたが、中には事情を悟つて「後でいいですかぬ男が「それでは先に。」と、自ら我慢して入つてみせ、「いい湯だから入つてみらっせ。」などとだまして、無理に水風呂のご馳走をして、皆で喜んだというのである。

### 佐藤新一さんからの聞き取り――

験があるので)「そんな低い声で聞こえつか。」とか「そんな声では、尻にしかれてしまってぞ。」とか「そんなでは、おかたにかつがせることなどがあつた。「ばんもち」逃げられんぞ。」などと掛けたり、「ちゃんとつけろ。」とか、様々な難題を出して、むこいじめをしたというのである。これが終ると、一同で熊野神社の暁詣りをしてもどつたというのである。

### 二本柳――



## 民俗の伝承 (17)

たにじどじよう  
田螺(ツブ)汁と泥鰌汁

羽田 稔

私が子供の頃の、舌(ベロ)が抜けるほど旨かつた思い出を綴ることにする。

昔は田園にツブが沢山いた。祖父は雪の降る前に田園のツブを竹べらで掘り出し集める。背負籠一杯になったそのツブを「つっこ」に入れて屋敷内の畑に埋めて保存する。(図参照)

やがて雪が降り始め、二尺ばかりの根雪となり、家の中に籠る日が多くなる頃ツブ汁にありつける。

母は大鍋を囲炉裏にかけ、だしの鱗節削りを始める。ツブ、じゃが芋、味噌、凍み豆腐、大根、ねぎなどを入れ、コトコトと煮込み出来上り、晩飯となる。

家族は大鍋を囲んで膳につく。母は皆の汁椀にツブ汁をよそう。湯気のたつ汁を吹きながら啜るツブの味噌汁の旨さは、今でも忘れられない「おふくろの味」である。また、ツブの身を楊枝で取って食うのも楽しみであった。

ツブは方言で田螺が正しいのだが、今の田園からは姿を消してしまった。

根雪が田畠を覆い、寒い昼下がり、父は、「今日はやけに寒いな。泥鰌汁で腹の中から暖まるか。」

と、こしこ(腰に着ける笊)を着け、スコップを持って出て行く。母は、「豆腐を一丁(今の豆腐の倍)買ってこい。」と頼む。

帰つて母に、「泥鰌取れべかない。」と問うと、「父は泥鰌取りの名人で、今まで一度も手ぶらで帰つたことはない。」

ツブは方言で田螺が正しいのだが、今の田園からは姿を消してしまった。

まもなく父は、「ウオー、寒い。」

と帰つてくる。こしこを覗くと寒泥鰌一杯盛っている。父の顔は満足そうに微笑んでいる。

姉は鱗節を削り始める。母は大鍋を囲炉裏に掛け、泥鰌を鍋に入れ、蓋を手で押える。しばらくして、泥鰌は熱さに堪えかね暴れ、蓋を跳ね上げようと凄まじい。

豆腐やねぎなどを入れて、寒泥鰌の味噌汁は出来上る。その旨いこと、ベロがぬけそうだ。大袈裟のようだが、本当に旨かつたのである。

田螺や泥鰌、小魚は農薬や家庭廃水で汚染され死滅してしまった。

祖父のツブの保存法や、父の雪の下の小堀に泥鰌が集まっている場所を突き止める技は、自然の生寶を持っていると同じである。

ツブや泥鰌を当時の鳥谷野の農家が皆食べていたのではない。私の祖父や父の自給自足のおかげである。七十歳の今、旨かつた話を綴ることを幸せに思つている。



# 要二やんの茶のみ話

— その三 —

加藤重芳

かかあの子

「おめいは、子供何人なした。」

「いや、おれは、子供一人もなしたことない。」

「子供、あまだいだべした。」

「いや、あれは、おれなした子供でない。」

「あれはみんな、おらいのががあなしたもんだ。」

と

言つて戻つていったので、橋番は、出すように言つたら、

「そんでは川を歩いて渡る。」

と

言つて追つかけたという。

(巾一間、長さ二〇間の板橋で、料金を大

人一人五厘、車・駕籠は一錢おいていけ。) た。そのため五厘橋の名がある。)

背中の孫

茂重どんの天気予報

嫁の里に孫を連れて行つた年寄りが、途中で荒川の橋が流されてしまつたが、途孫をおぶつて川を渡つた。

川の途中で転びそうになつたが、やつと

のこととで向う岸に着いた。やれやれと思つ

ていたら、背中の孫が言つたと。

「じいちゃん、おれぎつちりつかんでいたがら、転ばなくてよかつたない。」

息子が要三やんに聞いだ。

「おどつあん、この字何と読むの。」

返事できないでいると

「ほんじや、この字は。」

と聞いたが、これも読めないがら、息子に

「おどつあんはな、昔夜学で習つたから

どこのお祭だべ。随分人出でんねいか。」

つづいていたら、

「アハハ、おらがもんひきは、東海道…」

五十三つぎだあ。」

つづから、みんな

「もどの色は、なんだべ…。」

つづだぞ。」

五厘橋

五厘橋の橋を乞食が野寺の方から来たので、橋番が渡つて来た乞食に橋銭の五厘を

出るように言つたら、

「そんでは川を歩いて渡る。」

ついて戻つていったので、橋番は、

「そんでは川を歩いて渡る。」

と言つて追つかけたという。

(巾一間、長さ二〇間の板橋で、料金を大

人一人五厘、車・駕籠は一錢おいていけ。) た。そのため五厘橋の名がある。)

「茶のみ話」は、きつい田畠の仕事の合間に、みんなの一服という一休みの時とか、食事がすんだとの昼休みなどに、その時の仲間のうちの誰かが話し手になつて、いつもその時々の話をしては、みんなを喜ばせるものであった。

このくつろいだ大人たちの「茶のみ話」の間に、新しく仲間に入つた若者たちは、黙つてそれを聞きながら、大人になるための勉強をこつそりやつていたのである。

だから、「茶のみ話」は、いつも若者たちが大人になるための教科書であつたし、語り手はその指導者であつた。

家よりづない たんがら  
だ  
し、語り手はその指導者であつた。

荒井の忠一やんが「たんがら」こさいた。  
「どうせこさいんなら、でつかいの作つ

ペ。」つていうわけで、づないたんがらこ  
さえたど。

できあがつてから、背負つて外さんべ  
と思つたらば、戸口さつつかえて出らん  
にえがつたど。

忠一やん、いま家で「家、ほっこすか、  
たんがらばつこすか、考えてるつう話だ。」

五十三つぎの ももひき  
つぎはぎした股引はいてる要三やんに、  
仲間が声かけだ。

「要三やん、要三やん、おめいなかなかに  
んぎやかなもんひきはいてんなん。今日は

どこのお祭だべ。随分人出でんねいか。」

つづいたら、  
「アハハ、おらがもんひきは、東海道…」

五十三つぎだあ。」

つづから、みんな

「味見したら、うまいどが、しょっぱ  
いと、言わつせ。」

味見

女 「要三やん、お汁の味みてくんちえ。」

要三 「ウーン、よつく、わかんねがつたか  
ら。今一杯…。」

「味見したら、うまいどが、しょっぱ  
いと、言わつせ。」

か…」



やつちゃん

## 丹治伸吉

本家に住むやつちゃんの祖母は、天保十二年（一八四二）生れで、大正十二年まで存続した。いつもにこやかに着物を着て、白足袋を履き、囲炉裏か座敷に座つて非常に行儀がよく、やつちゃんは尊敬と畏れを抱いて、うやうやしく仕えた。新家の曾孫（私の妹）を見に歩いて来たらしく、三輪車を持ったやつちゃんと妹との三人の写真が残っている。

祖母は安政五年（一八五八）に生れ、昭和十一年没した。祖母十八歳の出産である。「ばつぱやん」ちょっと荒っぽい呼び方だが、従弟達は「ばつぱやん」と呼ぶ。やつちゃんは新宅で一般的に育つたのだから仕方がない。本人にこの呼称を用いると叱られるから要件だけを話した。



山に入っているのを見つけると、何者かわからないから遠くから声をかけて注意する。不意に近づくと、刃物を持っている相手だから何をされるかわからない。実際に物騒な話だが、それだからこそ、旦那様と崇められた。

また、立山といつて立木の売買が始まる。共同で一山の立木を買うのだが、買人の代表が山主と交渉する時の錢の呼び方が何千両などと景気よい。その頃は、貫とか百とか何割とかの言葉をよく使った。何掛などは蚕物買いが用いたようだが、やつちゃんにはわからなかつた。

契約が成立すると全員が山を囲み、山分けをするのだが、その時の山から湧き出すような話し声は、小学生の遠足どころではないとおつ母やんたちは笑っていた。「嫁にくるならその家の木小屋を見る」といわれるくらい木小屋を一杯にするのだが、櫛や櫛など火持ちのよい薪は仲買人に売り、自分も街に出る時、背負つたり車で持つていき、物々交換や小遣錢とした。

やつちゃんも、山の花など採つて朝早く友達と福島の街へ売りにいったことがある。どうしたらよいかわからず歩いていると、店の奥から女の人の呼ぶ声がする。まごまごしていると若い衆が手招きしてくれた。それから自信がつき、さっぱりしたことがある。その時、納豆売りの子供達何人にも出会つた。やつちゃんみたいな小さい子供は、大きい子供に、拳を振り上げられたり、小石を投げられたりして追い払われていた。夏休み一日だけの貴重な体験であつたと思う。

七百年の歳の流れをさかのぼり、この古城に立つて当時を夢想するに、何も語つてはくれない。地形的見地により語る外はあまり。

この館跡には、それらしいものは見当らない。ただあるのは、空堀の跡と山の傾斜面積である。二万五千の軍勢が立籠もつたには相応しい広さである。

そこで、私がまず考えた事は水の事である。この兵員を養う事の出来る水源をどこに求めたのであろうか。この山の頂上付近には井戸の形跡も見当らないし、掘つても水は出ないのであろう。この問題に取り組み思考するに、山裾までおりたのであろうか。

山裾の人家のあるところまで行けば井戸水はあるが、いざ合戦になれば、この山裾は敵の軍勢が押寄せて来るだろう。何分鎌倉軍は三十万とも三十三万ともいう大軍である。そうすると、山裾の水源地は不可能である。

この城の西の尾根つづきに五〇メートル位突出した山がある。人工的に手を加えた跡がある。古墳のような形で、上が平になつていて。おそらく、見張やぐらがあつたのではないか。この物見より下の杉林の中にバンガロー風の小屋があり、何だろうと下りて見た。偶然にもそこには湧き水があり、小さな池のような水たまりがあった。

昔（当時）からのものかは知らないが、ここだという直感がした。この水たまりが

山に入っているのを見つけると、何者かわからぬから遠くから声をかけて注意する。不意に近づくと、刃物を持っている相手だから何をされるかわからない。実際に物騒な話だが、それだからこそ、旦那様と崇められた。

また、立山といつて立木の売買が始まる。買人の代表が山主と交渉する時の錢の呼び方が何千両などと景気よい。その頃は、貫とか百とか何割とかの言葉をよく使つた。何掛けなどは蚕物買いが用いたようだが、やつちゃんにはわからなかつた。

契約が成立すると全員が山を囲み、山分けをするのだが、その時の山から湧き出すような話し声は、小学生の遠足どころではないとおつ母やんたちは笑っていた。「嫁にくるならその家の木小屋を見る」といわれるくらい木小屋を一杯にするのだが、櫛や櫛など火持ちのよい薪は仲買人に売り、自分も街に出る時、背負つたり車で持つていき、物々交換や小遣錢とした。

やつちゃんも、山の花など採つて朝早く友達と福島の街へ売りにいったことがある。どうしたらよいかわからず歩いていると、店の奥から女の人の呼ぶ声がする。まごまごしていると若い衆が手招きしてくれた。それから自信がつき、さっぱりしたことがある。その時、納豆売りの子供達何人にも出会つた。やつちゃんみたいな小さい子供は、大きい子供に、拳を振り上げられたり、小石を投げられたりして追い払われていた。夏休み一日だけの貴重な体験であつたと思う。

山に入っているのを見つけると、何者かわからぬから遠くから声をかけて注意する。不意に近づくと、刃物を持っている相手だから何をされるかわからない。実際に物騒な話だが、それだからこそ、旦那様と崇められた。

また、立山といつて立木の売買が始まる。買人の代表が山主と交渉する時の錢の呼び方が何千両などと景気よい。その頃は、貫とか百とか何割とかの言葉をよく使つた。何掛けなどは蚕物買いが用いたようだが、やつちゃんにはわからなかつた。

契約が成立すると全員が山を囲み、山分けをするのだが、その時の山から湧き出すような話し声は、小学生の遠足どころではないとおつ母やんたちは笑っていた。「嫁にくるならその家の木小屋を見る」といわれるくらい木小屋を一杯にするのだが、櫛や櫛など火持ちのよい薪は仲買人に売り、自分も街に出る時、背負つたり車で持つていき、物々交換や小遣錢とした。

やつちゃんも、山の花など採つて朝早く友達と福島の街へ売りにいったことがある。どうしたらよいかわからず歩いていると、店の奥から女の人の呼ぶ声がする。まごまごしていると若い衆が手招きしてくれた。それから自信がつき、さっぱりしたことがある。その時、納豆売りの子供達何人にも出会つた。やつちゃんみたいな小さい子供は、大きい子供に、拳を振り上げられたり、小石を投げられたりして追い払われていた。夏休み一日だけの貴重な体験であつたと思う。

## 五 石朝日館の地形的考察

加藤 春雄

七百年の歳の流れをさかのぼり、この古城に立つて当時を夢想するに、何も語つてはくれない。地形的見地により語る外はあまり。

この館跡には、それらしいものは見当らない。ただあるのは、空堀の跡と山の傾斜面積である。二万五千の軍勢が立籠もつたには相応しい広さである。

そこで、私がまず考えた事は水の事である。この兵員を養う事の出来る水源をどこに求めたのであろうか。この山の頂上付近には井戸の形跡も見当らないし、掘つても水は出ないのであろう。この問題に取り組み思考するに、山裾までおりたのであろうか。

山裾の人家のあるところまで行けば井戸水はあるが、いざ合戦になれば、この山裾は敵の軍勢が押寄せて来るだろう。何分鎌倉軍は三十万とも三十三万ともいう大軍である。そうすると、山裾の水源地は不可能である。

そこで、私がまず考えた事は水の事である。この兵員を養う事の出来る水源をどこに求めたのであろうか。この山の頂上付近には井戸の形跡も見当らないし、掘つても水は出ないのであろう。この問題に取り組み思考するに、山裾までおりたのであろうか。

この時、城主、大将共はどんな作戦を練り、どんな戦いをしたのであろうか。吾妻鏡によれば、軍を二分し、吾妻中道を通り佐原に出たらしい。ある学者は、その当時そんな中腹に道などなかつたろうというが、私はあつたと思う。それは二本松から、また塙沢から今の中練習場の中を通り、土湯に出、佐原に出る道と、古い道形はいくらもある。また水原から陽林寺に出る道、荒井から鳥川に出る道はいくらでもあつたのではないか。この物見より下の杉林の中にバンガロー風の小屋があり、何だろうと下りて見た。偶然にもそこには湧き水があり、小さな池のような水たまりがあった。

この時、城主、大将共はどんな作戦を練り、どんな戦いをしたのであろうか。吾妻鏡によれば、軍を二分し、吾妻中道を通り佐原に出たらしい。ある学者は、その当時そんな中腹に道などなかつたろうというが、私はあつたと思う。それは二本松から、また塙沢から今の中練習場の中を通り、土湯に出、佐原に出る道と、古い道形はいくらもある。また水原から陽林寺に出る道、荒井から鳥川に出る道はいくらでもあつたのではないか。この物見より下の杉林の中にバンガロー風の小屋があり、何だろうと下りて見た。偶然にもそこには湧き水があり、小さな池のような水たまりがあった。

この時、城主、大将共はどんな作戦を練り、どんな戦いをしたのであろうか。吾妻鏡によれば、軍を二分し、吾妻中道を通り佐原に出たらしい。ある学者は、その当時そんな中腹に道などなかつたろうというが、私はあつたと思う。それは二本松から、また塙沢から今の中練習場の中を通り、土湯に出、佐原に出る道と、古い道形はいくらもある。また水原から陽林寺に出る道、荒井から鳥川に出る道はいくらでもあつたのではないか。この物見より下の杉林の中にバンガロー風の小屋があり、何だろうと下りて見た。偶然にもそこには湧き水があり、小さな池のような水たまりがあった。

鳥川の朝日館山裾にある国史跡の板碑（阿弥陀三尊）のある墓地を、土地の人はなぜかサト墓と呼んでいます。そのサト墓についての真意は解らない。

里墓 お詣りする墓。墓地が遠い場合近くに造る墓。武将達が異國の戦場で戦死した場合、これを近くに造り、供養する墓。この意広く解釈されるものと思う。

天は語らず 人をして語らしむ

平成2年4月1日

# 昔の食事

## —「晴れの膳」の再現—



民家園では、今年度も三月四日に「昔の食事」として、昭和初期頃の「節句の祝い膳」を再現しました。当日の参加者の感想をご紹介します。

今回の「節句の祝い膳」の献立

- ・ 吸い物（鶏肉、みつ葉）
- ・ 煮物（長芋、人参、ごぼう、椎茸、にしん、凍豆腐、こんにゃく）
- ・ あさづきの白あえ
- ・ 豆かずのこ
- ・ 青菜のおひたし

それぞれに与えられた環境と生活空間の中で、社会生活の基本である家族というものの繋がりを、精神的な面で事実大切にしてきた民俗意識が日増しに薄れていって見る昨今を思う時、民家園の意図するこうした行事は極めて意義のあるものと思います。自我が一方的に主張され、個人の尊厳が強く説かれる現代とはいえ、人間が単体のみで生活を賄うということは至難のことです。

節句の祝膳に寄せて

まずは、昨日の祝膳の席にお招き頂きました。

福島市三河北町 高村 廉子  
先日は節句の膳の行事にお招き下さいました。  
トマトやきゅうり等、一年中でまわり食物の旬などどこ吹く風、お金を払いさえすれば何でも食べられるようなご時勢です。そんな中で、外国から日本食が見直されているという記事を読み、季節の物をじよろしく取り入れて食事をして、昔をふと田舎に連れて来たときのことを思い出しました。

にしておりました。ひな人形を飾り、ひし  
餅は飾つても、特別な料理は知らなかつた  
ので参考になりました。由来も、秋山先生  
に分りやすく説明していただき、感謝して  
おります。又、味も素朴でおいしくいただ  
きました。

旧のひな祭りの今月二十九日には、私も  
「晴れの膳」を復習再現し、家族にも楽し  
んでもらひ、毎年の習慣にぜひしたいと  
思つております。又、民家園のつどいの会  
員にしていただき、年中行事や、民間伝承  
を教えていただき、子供達にしつかり伝え  
てやりたいと心はずませております。

「晴れの膳」に参加させていただき、ありがとうございました。民家園は何度か見学させていただきましたが、一軒一軒きちんと案内していただいたのは初めてで、疑問にすぐ答えていただけたのには、うれしく思いました。私はこの様な民家が多くつたところで育ったのですから、家や道具を見るたびに、その頃遊びまわっていた幼い自分や友達の姿をいつもだぶらせてしまっています。

まず、立派な塗りのお膳に目を見張らせました。栄養も考えられ、材料のそれぞれ戴きました。現在何気なく食べている物も昔の人にとってはご馳走だったのですね。私共のために早くから色々とご準備くださいました職員の方々、ボランティアの皆様ありがとうございました。

す。陰になつて支える者、それをリードする者が、相互に陸みあう中にこそ、決適で

うございました。今般の行事は又とな  
い機会と思ふました。

いろり

民家園の各民家・展示館に置いてあるノート、ここには、入園者のみなさんの民家園で感じたこと、覚えたこと、要望などが自由に書いてあります。そのいくつかを紹介します。(平成元年1月～2年1月)

小野家は、小生（清二）の父親である石井清助の実家であつた。父清助は、小野家の次男であったが、仙台の石井家の婿養子として迎えられたこの小野家は、清二の母親つのロマンの家であったと知らされている。今この室に立ち寄り、当時の母つねの苦労の姿が浮んでならない。心から冥福を祈るものである。父清助は、一八六三年生れである。今から百二十六年前である。

次男であつたが、仙台の石井家の婿養子として迎えられたこの小野家は、清二の母親つのロマンの家であつたと知らされている。今この室に立ち寄り、当時の母つねの苦労の姿が浮んでならない。心から冥福を祈るものである。父清助は、一八六三年生れである。今から百一十六年前である。

ジが合わず、考えさせられるものがあります。

(十月二十一日)

(八月十六日)

いろいろな家をみたけれど、いちばんめずらしかった家はここ。ふとんがしいてあつて、中身はわたやはねのフトンじゃなくてわらだった。東京都から七時間かけてきてよかつた。

(八月十三日)

ブラジルより三十二年ぶりで帰国。一年間労働してブラジルに帰ります。本当に出国当时がなつかしく生涯の思い出です。ラジルでは今でも益踊りが盛んで、日本の旧きものを大変可愛がつております。祖国日本も旧きものをこれからも大切にして下さい。

十一月三日

旧渡辺家自由ノートより  
今日は素晴らしい天気です。周りの緑がとても美しくあじさいも咲き小鳥の声もしきりです。家中に入つて見回すと高い葦葺屋根の天井が見えて生家のくらしを思い出します。冬は天井から雪が舞い込み寒い風が入つて来たものです。いろいろでは木をどんどん焚いて家中がススであちこち里くなつて白い服を着て触つたりしたら汚れこまゝます。

**田畠野家自由ノートより**  
おじいちゃんが生まれた家をみにきました。とても古く、今の家に比べると電気もテレビもなく私たちは、とてもぜいたくな生活をしていました。

里の生活が忍ばれてつい昨日の様な気がします。昔があつて今が有る事を深く感じ

（六月四日）

ました。これから未来に向つて平和に全世界が伸びて行ける様に祈ります。

民家の構造一つ見ても、当時の生活様式や風俗を知ることができる。開炉裏の席割など、家長制度が伺い知るとともに、決して豊かではなかつて暮らしの中から、こゝま

と、家庭制度が伺い知るとともに、決して豊かではなかつた暮らしの中から、たくましく生きた大先輩に心から感謝する気持ちを抱いた。

もつとやつてみたいと思つた。

展示館自由ノートより

昔から民家を訪れ過ぎ去った時間を懐ぶ  
事が出来ました。心安まる時を持てた事、  
うれしく思います。七十代の父や母は、つ  
い最近迄の自分達の生活がそこにある様で  
目を輝かせていました。自然と共に生きて  
いた頃、ステキです。

田奈良繪家自由ノートよこ

むかしのひな人形は、なかなか手に入らないので、見るだけでも、幸せ。

